

幼稚園教員養成スタンダードに基づく実習到達規準から捉えた実習成果 —実地教育Ⅳ（幼稚園教育実習）における単位数増加の効果に注目して—

Student Teachers' Outcome Using Attainment Benchmark for Practice Teaching Based on Teacher Standards for Kindergarten Teacher Training Program: Focusing on Effects of Changes in Increased Credits of Practice Teaching Ⅳ

別 惣 淳 二* 長 澤 憲 保**
BESSO Junji NAGASAWA Noriyasu

本研究の目的は、兵庫教育大学学部4年次に応用実習として履修する実地教育Ⅳ（幼稚園教育実習）の単位数が2単位から3単位に増加したことに伴い、幼稚園教員養成スタンダードに基づく実地教育Ⅳの実習到達規準を用いて、実習生の資質能力についての到達度評価がどの程度変容し、実習到達規準についてどの程度到達しているのかを4年次の実習生と実習指導教諭を対象に実施した質問紙調査から明らかにすることである。

その結果、実習前・後による実習生の到達度評価の変容に関しては、2単位の平成22年度よりも3単位の平成23年度の方が、より多くの実習到達規準の項目において実習生の到達度評価が有意に変化していることが確認された。また、実習後の実習生の到達度評価については、実習到達規準の項目に関して平成22年度と平成23年度を比較すると、平成22年度よりも平成23年度の方が「ある程度身につけている」や「かなり身につけている」と評価できる状態に達している項目が多く、検定結果においても平成23年度の到達度評価の方が有意に高い項目が多いことが確認された。さらに、平成22年度と平成23年度の実習指導教諭による実習生の到達度評価を比較すると、平成22年度よりも平成23年度の方が実習指導教諭の到達度評価が高くなっていた。このことから、実地教育Ⅳの単位数増加によって、実習生の到達度評価が有意に高まるのと同様に、実習指導教諭による実習生の到達度評価も高くなっていることが明らかになった。

キーワード：幼稚園教員養成スタンダード、実習到達規準、実地教育Ⅳ（幼稚園教育実習）、単位数増加、実習成果

Key words : teacher standards for kindergarten teacher training program, attainment benchmark, practice teaching Ⅳ (practice teaching at kindergarten), changes in increased credits, outcome of practice teaching subjects

I 研究の目的

2006（平成18）年の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」によって、「大学の教職課程を『教員として最小限必要な資質能力』を確実に身に付けさせるものに改革する」¹⁾ という方向性が打ち出され、教職課程の質的向上をねらいとして教職実践演習の新設・必修化が提唱された。ところが、これまで養成段階で身に付けるべき「教員として最小限必要な資質能力」とはどのような資質能力であるのか、また、大学卒業時まで学生に最小限必要な資質能力がどの程度身に付いているのかについて、教員養成を行ってきた大学・学部で明らかにされてこなかったことから、「教員として最小限必要な資質能力」を明確にすることが喫緊の課題となっている。

また、これまでの教員養成の状況は、養成段階の学生に「教員として最小限必要な資質能力」を身に付けさせる上で最も重要な学修機会の一つである教育実習にも同

様の課題をもたらしてきた。つまり、大学4年間の各教育実習科目においてどのような資質能力をどの程度実践できるようになる必要があるのかを表す到達規準は明確に示されてこなかった。そのために、実習生の指導を実習校園に一任することの多い教育実習では、実習生への指導目標、指導内容、実習生の成績評価の判定は実習校園の指導教諭によって異なるという現実があった。他方、実習生についても、どのような資質能力をどの程度できるようにならないかという到達規準がないために、それに照らして自己評価を行う機会がなかった。さらに、教育実習カリキュラムの評価に関しても、各教育実習科目において実習生にどのような資質能力をどの程度できるようにならないといけないのか明確にした上で実習生の到達度を把握しなければ、教員養成の質を保証したり、「最小限必要な資質能力」を確実に身に付けさせるために教育実習カリキュラムを改善したりすることは困難である。

* 兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻小学校教員養成特別コース 准教授

平成29年10月25日受理

** 兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻授業実践開発コース 教授

こうした課題から、1991（平成3）年の大学設置基準の大綱化以前から理論と実践の往還に基づき教員としての実践的指導力の育成を目指して1～4年次の実地教育科目（教育実習科目）の体系化を進めてきた兵庫教育大学の教育実習カリキュラムを事例にしながら調査研究を行ってきた。具体的には、別惣他は、大学卒業時までに幼稚園教員として身につけるべき資質能力を示した幼稚園教員養成スタンダードを開発し²⁾、それに基づいて兵庫教育大学の4年間にわたる幼稚園関連の実地教育科目（実地教育Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ）の実習到達規準を策定した³⁾。その上で、実際に実習生が実地教育科目を通してどの程度成長し、実習到達規準にどの程度到達できているのか、また、到達するためには事前にどのような能力を身につけておく必要があるのか、さらに実習後に何を学び、何を身につけていきたいと考えているのかを3年次の4週間教育実習を済ませた学生が4年次後期に必修科目として出身地の公私立幼稚園で行う2週間の教育実習（実地教育Ⅳ）を事例にして調査研究を行ってきた⁴⁾。

ところが、兵庫教育大学では2008（平成20）年の教育職員免許法施行規則の一部改正を先取りする形で、2008（平成20）年度入学生より学部カリキュラムを改定し、実地教育Ⅳ⁵⁾を2単位から3単位にした。教育実習期間の長期化や4年次に主免教育実習の応用あるいは発展としての選択（応用）教育実習を設定する動きは、近年の国立教員養成系大学・学部の教育実習カリキュラム改革に共通して見られる傾向である^{6) 7)}。しかし、実地教育Ⅳの実習期間が2週間から3週間になることによって、実習生の教師として必要な資質能力に対する到達度評価がどの程度変化するのは明らかにされていない。それを明らかにすることは、実地教育Ⅳの改善に向けての示唆を得るだけでなく、4年次後期の「教職実践演習」を実施する上で実地教育Ⅳによって実習生が「最小限必要な資質能力」をどの程度身に付けていると認識しているのかを把握するための根拠を得ることになると考えられる。

これまでの幼稚園教育実習の成果を質問紙調査から明らかにした先行研究を見ると、幼稚園教育実習の園評価と実習生の事後の自己評価との比較を通して、大学における事前事後指導の課題を明らかにしようとする研究が散見される⁸⁾。これらの研究では、多くが教育実習評価票を用いて実習園の評価と実習生の自己評価との差異に注目するため、教育実習において実習生の資質能力に関する到達度評価がどの程度変化したのかは明らかにされていない。また、実習期間の変化によって実習園の評価と実習生の自己評価がどのように変化したのかについても明らかにされていない。

また、高橋は、2年次の1週間の幼稚園実習と3年次の3週間の幼稚園実習の終了後に学生の学びについての

自由記述を分析し、それぞれの学年で実施している幼稚園実習で学ぶ保育者に必要な資質能力を明らかにしている⁹⁾。しかし、この研究ではその学年で実施している幼稚園実習の期間の違いが実習で学ぶ資質能力にどのように影響を及ぼすのかは明らかにされていない。

さらに、高橋・大瀧・今村は、3年次生と短大1年次生対象の2週間の幼稚園教育実習終了後に質問紙調査を実施し、実習前の「教材研究」と「子どもの気持ちの読み取り」の習熟度が実習後の配属・指導計画・保育技術に関する満足度、さらには対保育者・対子ども・保育実践に関する達成度にとどのような影響を及ぼしているかを分析している¹⁰⁾。しかし、2週間の幼稚園実習の成果に注目しているが、幼稚園実習が3週間になった場合の成果には注目していない。また、この研究では実習前における特定の資質能力の習熟度が実習後の満足度や達成度に及ぼす影響を分析しているが、実習生の資質能力に関する自己評価が幼稚園実習によってどのように変化したのかについては分析していない。

そこで本研究では、4年次履修の実地教育Ⅳの単位数が2単位から3単位になったことに伴い、幼稚園教員養成スタンダードに基づく実地教育Ⅳの実習到達規準を用いて、実習生の資質能力の到達度評価がどの程度変容し、実習到達規準にどの程度到達しているのかを4年次の実習生と実習指導教諭を対象に行った質問紙調査をもとに明らかにすることを目的とする。

Ⅱ 研究の方法

1. 調査対象

2010（平成22）年度の実地教育Ⅳ（2単位）において幼稚園教育実習を選択した実習生と実習指導教諭、それぞれ20人ずつと、2011（平成23）年度の初等応用実習（実地教育Ⅳ）（3単位）において幼稚園教育実習を選択した実習生と実習指導教諭、それぞれ33人ずつを調査対象とした。

2. 調査時期

平成22年度の調査時期については、20人の実習生に対して実習前の平成22年6月に「実地教育Ⅳ（幼稚園実習）の到達規準に関する事前調査」（質問紙調査）を、そして、実習後の11月に「実地教育Ⅳ（幼稚園実習）の到達規準に関する事後調査」（質問紙調査）を実施した。また、実習指導教諭に対しては、実習後の平成22年12月に「実地教育Ⅳの到達規準に関するアンケート調査」（質問紙調査）を実施した。

平成23年度の調査時期については、33人の実習生に対して実習前の平成23年7月に「初等応用実習（幼稚園実習）の到達規準に関する事前調査」（質問紙調査）を、そして、実習後の11月に「初等応用実習（幼稚園実習）の到達規準に関する事後調査」（質問紙調査）を実施し

た。また、実習指導教諭に対しては、実習後の平成23年11月に「初等応用実習の到達規準と到達度に関するアンケート調査」(質問紙調査)を実施した。

3. 実習生に対する調査

調査の実施手続きとしては、平成22年度も平成23年度も事前調査は大学での実習オリエンテーション時に学生に一斉配布し、その場で回答を求め、回収した。他方、事後調査については、平成22年度も平成23年度も大学での事後指導の際に学生に一斉配付し、その場で回答を求め、回収した。事前調査と事後調査に回答している実習生のデータ数は、平成22年度が20であり、平成23年度が31であった。

質問紙調査の内容は、平成22年度も平成23年度も、幼稚園教員養成スタンダードに示す「幼児理解力」「幼児への指導・援助力」「教職の基礎的遂行力」「保育内容の展開力」「保育評価・改善力」「職能向上力」「保護者・地域との連携力」「保育計画力」の8領域51項目を用いて、実習生に実習前と実習後の到達度を5件法(1. 全く身についていない、2. あまり身についていない、3. 少し身についている、4. ほぼ身についている、5. 十分身についている)で回答を求めた。それに加えて、事後調査では、幼稚園教員養成スタンダードを用いて、「実習を通して自身が成長したと感じたこと」「今後の自己の学習課題であると感じたこと」「実習前に学んでおくべきだったと感じたこと」について記述方式で回答を求めた。

4. 実習指導教諭に対する調査

調査の実施手続きとしては、平成22年度も平成23年度も実習園の園長を通じて実習指導教諭に質問紙調査の回答を依頼し、回答後各自で返信用封筒を用いて個別に返送する形を取った。実習生のデータと対応している実習指導教諭のデータ数は、平成22年度が20であり、平成23年度が31であった。

質問紙調査の内容は、幼稚園教員養成スタンダードの8領域51項目を用いて、指導した実習生の到達度を5件法(1. 全く身についていない、2. あまり身についていない、3. 少し身についている、4. ほぼ身についている、5. 十分身についている)で回答を求めた。

III 研究の結果及び考察

1 実習前・後の到達度評価の変化

(1)実習到達規準の項目ごとにみた実習生の到達度評価の変容

平成22年度と平成23年度の実地教育Ⅳ(幼稚園教育実習)において、実習生に幼稚園教員養成スタンダードの51項目が実習前と実習後にどの程度到達できているのかを自己評価させ、その分析結果を平均値で示したものが表1である^{11) 12)}。

表1の平成22年度における実習前と実習後の平均値の差に注目すると、スタンダード1「幼児理解力」では、「(3)幼児の様々な行動から、心情や意欲等の内面を理解することができる」が実習前より実習後の方が値は高く、1%水準で有意差が認められた。しかし逆に、スタンダード3「教職の基礎的遂行力」の「(34)心身共に良好な状態であるように自己管理ができる」では、実習前よりも実習後の方が値が低く、5%水準で有意差が認められた。また、実習到達規準に該当しない項目であるが、スタンダード7「保護者・地域等との連携力」の「(46)保護者との会話を大切にし、積極的に関わることができる」と「(43)保護者や地域の人々と手を携え、共に歩んでいこうとする」では、実習前よりも実習後の方が値が低く、5%水準で有意差が認められた。このことから、平成22年度の2週間の教育実習では、実習到達規準に該当する項目を見ると、「幼児理解力」「教職の基礎的遂行力」のスタンダード領域の2項目について実習前・後の到達度評価に有意な変化が見られた。

他方、平成23年度における実習前と実習後の平均値の差に注目すると、スタンダード1「幼児理解力」では、「(8)先入観を持たずに、幼児のありのままの姿を共感的・肯定的に受け止めることができる」($p<.05$)、「(1)幼児の遊びの姿から、一人ひとりの興味や関心を捉えることができる」($p<.001$)、「(3)幼児の様々な行動から、心情や意欲等の内面を理解することができる」($p<.01$)、「(2)個々の幼児の人との関わり方や集団の中での子育てを捉えることができる」($p<.01$)、「(4)幼児の気になる行動や態度についての要因を自分なりに分析することができる」($p<.01$)、「(5)幼児期の発達の特徴について理解している」($p<.01$)、「(6)幼児の身体の発育や病気について理解している」($p<.05$)の各項目は実習前よりも実習後の方が値が高く、有意差が認められた。スタンダード2「幼児への指導・援助力」の「(10)幼児の状況の変化や多様な要求に対して、一人ひとりに丁寧な関わりができる」($p<.01$)、「(13)幼児が十分な満足感や達成感を感じられるように関わることができる」($p<.001$)、「(9)状況や課題等に応じて意思決定や行為選択ができる」($p<.05$)の各項目では、実習前よりも実習後の方が値が高く、有意差が認められた。スタンダード3「教職の基礎的遂行力」の「(48)保護者や地域の人々に日常の挨拶がきちんとできる」($p<.05$)、「(35)社会人としての適切な礼儀、身だしなみ、言葉遣いができる」($p<.05$)、「(39)一つのチームとして園の保育に取り組むことができる」($p<.001$)、「(16)幼児に対して正しくわかりやすい言葉遣いができる」($p<.05$)の各項目では、実習前よりも実習後の方が値が高く、有意差が認められた。また、実習到達規準には該当しないが「(50)事務的な仕事や園内整備等の仕事について理解している」の項目についても、実習

表1 幼稚園教員養成スタンダードからみた実地教育Ⅳ（幼稚園教育実習）における事前と事後の到達度評価

実習到達標準の妥当性	平成22年度					平成23年度					22年度と23年度の実習前の差	22年度と23年度の実習後の差
	実習前		実習後			実習前		実習後				
	平均値(SD)	%	平均値(SD)	%	t検定	平均値(SD)	%	平均値(SD)	%	t検定		
1) 幼児理解力												
○	(8)先入観を持たずに、幼児のありのままの姿を共感的・肯定的に受け止めることができる。											
	3.63(.68)	60.0	3.90(.72)	80.0		3.97(.60)	80.1	4.19(.48)	96.8	*		
○	(1)幼児の遊びの姿から、一人ひとりの興味や関心を捉えることができる。											
	3.50(.69)	60.0	3.75(.55)	70.0		3.52(.68)	54.8	3.94(.57)	80.6	***		
○	(3)幼児の様々な行動から、心情や意欲等の内面を理解することができる。											
	2.90(.79)	20.0	3.35(.67)	45.0	**	3.29(.64)	31.2	3.65(.61)	58.1	**		
○	(2)個々の幼児の人との関わり方や集団の中での育ちを捉えることができる。											
	3.00(.80)	25.0	3.20(.70)	35.0		3.42(.62)	48.4	3.77(.76)	64.5	**	*	**
○	(4)幼児の気になる行動や態度についての要因を自分なりに分析することができる。											
	3.15(.81)	35.0	3.40(.94)	55.0		3.29(.69)	41.9	3.68(.60)	61.3	**		
○	(5)幼児期の発達の特性について理解している。											
	3.30(.73)	45.0	3.45(.61)	50.0		3.32(.60)	38.7	3.68(.60)	61.3	**		
○	(6)幼児の身体の発育や病気について理解している。											
	2.60(.68)	5.0	2.85(.67)	15.0		3.13(.67)	29.0	3.42(.72)	48.4	*	**	**
○	(7)特別支援を必要とする幼児の特徴について理解している。											
	2.85(.88)	15.0	2.95(.83)	20.0		3.16(.78)	38.7	3.23(.72)	38.7			
2) 幼児への指導・援助力												
◎	(12)目線を合わせて幼児に接し、心通わせながら関わるができる。											
	4.00(.73)	75.0	4.05(.89)	75.0		4.23(.67)	87.1	4.39(.62)	93.6			
◎	(10)幼児の状況の変化や多様な要求に対して、一人ひとりに丁寧に関わりができる。											
	3.55(.61)	60.0	3.30(.92)	30.0		3.61(.62)	54.9	4.07(.77)	80.6	**		**
○	(14)幼児の主体性や自立性の育ちを大切にしたり関わりができる。											
	3.45(.89)	50.0	3.35(.75)	40.0		3.48(.68)	45.2	3.77(.62)	74.2		*	*
○	(13)幼児が十分な満足感や達成感を感じられるように関わるができる。											
	3.21(.86)	45.0	3.11(.99)	35.0		3.32(.60)	38.7	3.81(.79)	64.6	***		**
○	(9)状況や課題等に応じて意思決定や行為選択ができる。											
	3.05(.69)	25.0	3.15(.81)	35.0		3.23(.56)	22.6	3.55(.62)	54.8	*		
○	(11)幼児一人ひとりに配慮しながら、集団としてまとまりのある指導ができる。											
	2.95(.83)	25.0	3.05(.76)	25.0		2.94(.77)	19.3	3.29(.69)	41.9			
3) 教職の基礎的遂行力												
◎	(38)他の人の意見に謙虚に耳を傾け、自ら学ぼうとする。											
	4.10(.85)	90.0	4.05(.95)	85.0		4.36(.61)	93.5	4.58(.56)	96.8			*
◎	(34)心身共に良好な状態であるように自己管理ができる。											
	3.90(.91)	65.0	3.65(.81)	55.0	*	4.19(.79)	77.4	4.13(.92)	77.4			
◎	(48)保護者や地域の人々に日常の挨拶がきちんとできる。											
	4.05(1.00)	80.0	4.05(.95)	85.0		4.52(.68)	90.3	4.77(.43)	100.0	*		***
◎	(35)社会人としての適切な礼儀、身だしなみ、言葉遣いができる。											
	3.65(.99)	65.0	3.75(.91)	65.0		4.07(.77)	74.2	4.39(.62)	93.6	*		**
◎	(15)幼児に公平・公正な態度で関わるができる。											
	3.95(.67)	85.0	4.00(.80)	80.0		4.32(.54)	96.8	4.45(.51)	100.0		*	*
◎	(39)一つのチームとして園の保育に取り組むことができる。											
	3.60(1.05)	55.0	3.55(1.00)	55.0		3.71(.86)	58.1	4.19(.60)	90.3	***		*
◎	(37)常に明るく、積極的に物事に取り組んでいくことができる。											
	3.65(1.14)	60.0	3.70(.98)	65.0		4.19(.79)	77.4	4.48(.63)	93.5		*	**
◎	(33)保育者としての自覚と誇り、使命感を持っている。											
	3.60(.88)	60.0	3.70(1.03)	65.0		4.03(.75)	74.2	4.19(.65)	87.1			*
◎	(16)幼児に対して正しくわかりやすい言葉遣いができる。											
	3.55(.76)	50.0	3.50(.95)	60.0		3.77(.72)	61.3	4.07(.73)	77.4	*		*
○	(40)困難な事態に対しても問題解決に向けて粘り強く取り組むことができる。											
	3.85(.88)	65.0	3.85(1.04)	75.0		4.03(.75)	74.2	4.19(.70)	83.9			
◎	(51)危機管理の意識を持っている。											
	3.55(.89)	55.0	3.35(1.04)	40.0		3.74(.68)	61.3	3.87(.76)	71.0			*
○	(50)事務的な仕事や園内整備等の仕事について理解している。											
	3.25(1.02)	10.0	3.15(.99)	30.0		3.13(.96)	35.5	3.55(.89)	48.4	*		
4) 保育内容の展開力												
◎	(18)絵本、歌、製作、運動遊び等に関する面白さを知っている。											
	3.90(1.12)	70.0	4.00(.80)	80.0		3.94(.81)	71.0	4.32(.83)	83.9	*		
◎	(23)保育内容に活用できる得意な分野を持っている。											
	3.40(1.00)	45.0	3.60(1.14)	65.0		3.32(.87)	38.7	3.61(.92)	45.2			
○	(17)保育内容の知識に基づき、教材研究ができる。											
	3.30(.92)	50.0	3.25(.79)	45.0		3.07(.68)	19.3	3.61(.72)	54.9	***		
◎	(19)ピアノ、手遊び、パネルシアター、運動遊び等の技術を持っている。											
	2.95(.89)	25.0	2.85(.88)	25.0		3.16(.52)	22.6	3.19(.79)	35.5			
○	(21)自然や自然物と関わり、保育に活用することができる。											
	3.15(.81)	40.0	3.15(.88)	30.0		2.93(.63)	16.1	3.39(.88)	45.2	*		

幼稚園教員養成スタンダードに基づく実習到達規準から捉えた実習成果

○ (22)教材を再構成できる柔軟性がある。	2.55(.89)	15.0	2.60(.88)	15.0	2.87(.67)	16.1	3.10(.87)	35.5		
○ (20)音楽遊び、造形遊び、運動遊び等の指導方法を知っている。	2.85(.99)	25.0	2.75(.85)	15.0	2.94(.73)	22.6	3.16(.69)	32.3		
5) 保育評価・改善力										
◎ (31)自らの保育を振り返り、反省・評価ができる。	3.80(.77)	70.0	3.85(.99)	70.0	3.77(.76)	64.5	4.42(.62)	93.6 ***	*	
◎ (32)保育の評価を次の保育や指導計画の改善に生かすことができる。	3.45(.95)	50.0	3.45(.95)	40.0	3.74(.58)	67.8	4.10(.79)	80.7 *	*	
○ (29)幼児の姿や発想を大切にし、臨機応変に計画を修正することができる。	2.65(.81)	15.0	2.70(.80)	15.0	3.07(.73)	22.6	3.48(.85)	51.6 *	**	
◎ (30)観察や記録の方法について理解している。	3.55(.95)	55.0	3.55(.89)	55.0	3.74(.77)	67.7	4.19(.75)	80.6 **	**	
6) 職能向上力										
◎ (41)研修に積極的に参加して、保育者としての専門性を高めようとする。	3.55(1.00)	55.0	3.20(1.11)	35.0	3.68(.94)	54.9	3.87(.85)	71.0		*
◎ (36)自然や社会の事象に興味や関心を持ち、自らの保育に取り入れようとする。	3.45(1.00)	45.0	3.55(1.00)	50.0	3.45(.89)	45.2	3.87(.62)	74.2 *		
○ (42)社会参加活動等を通じて多様な人々との出会いや経験を深めようとする。	3.60(1.05)	55.0	3.50(.95)	40.0	3.68(.87)	61.3	4.03(.84)	74.2 *		*
○ (49)保護者や地域の人々との関わりから学び、それを自らの保育に生かそうとする。	3.40(.94)	50.0	3.30(1.26)	50.0	3.26(.86)	38.8	3.52(.96)	45.2		
7) 保護者・地域等との連携力										
○ (47)保護者の話にしっかりと耳を傾け、聴くことができる。	3.95(.83)	65.0	3.65(.99)	65.0	3.97(1.02)	61.3	4.16(.90)	74.2		
(46)保護者との会話を大切にし、積極的に関わることができる。	3.70(1.08)	60.0	3.25(1.07)	40.0 *	3.71(1.01)	51.6	3.71(1.01)	51.6		
(43)保護者や地域の人々と手を携え、共に歩んでいこうとする。	3.60(1.00)	60.0	3.10(1.21)	30.0 *	3.58(.92)	61.3	3.61(.84)	51.6		
(53)幼稚園と保育所や小学校との連携に関する知識を持っている。	2.95(.89)	30.0	3.05(1.05)	30.0	3.52(.77)	54.9	3.68(.79)	54.8	*	*
(44)幼稚園のある地域に関心を持ち、地域の特性を理解しようとする。	3.15(.67)	30.0	3.20(1.06)	45.0	3.42(.89)	41.9	3.77(.85)	58.1		*
8) 保育計画力										
○ (26)ねらい、内容、環境構成、保育者の援助等、整合性のとれた1日の指導計画を立てることができる。	2.90(.85)	25.0	3.15(.88)	30.0	2.90(.83)	19.3	3.42(.76)	51.6 **		
○ (27)幼児の実態と興味や関心を捉え、幼児の活動を予測した指導計画を立てることができる。	3.00(.86)	30.0	3.10(.91)	30.0	3.00(.77)	25.8	3.58(.85)	54.8 ***		
◎ (28)季節の変化や行事の内容を考慮して、指導計画を立てることができる。	3.15(.81)	35.0	3.30(.92)	45.0	3.10(.79)	29.0	3.55(.85)	58.1 **		
○ (25)教育課程や長期、短期の指導計画の関連性について理解している。	3.10(.97)	35.0	3.15(.99)	40.0	3.00(.86)	25.8	3.39(.84)	54.8 *		
◎ (52)幼稚園教育要領の内容を理解している。	3.35(.99)	45.0	3.20(1.06)	40.0	3.23(.76)	35.5	3.65(.88)	64.5 **		

(註1)分析結果は、平成22年度と平成23年度に実地教育Ⅳ(幼稚園教育実習)を履修した実習生、それぞれ N=20と N=31のデータに基づいている。
 (註2)項目番号の前の「○」は、実習指導教諭が回答した実習到達規準としての適合度の平均値が3.50以上4.00未満で、5件法の「4.ほぼあてはまる」と「5.十分あてはまる」の回答率が50.0%以上であり、実習到達規準としてある程度妥当性のある項目であることを示す。項目番号の前の「◎」は、実習指導教諭が回答した実習到達規準としての適合度の平均値が4.00以上で、5件法の「4.ほぼあてはまる」と「5.十分あてはまる」の回答率が80.0%以上であり、実習到達規準としてかなり妥当性の高い項目であることを示す。
 (註3)実習前と実習後の平均値は、5件法 (1.全く身についていない、2.あまり身についていない、3.少し身についている、4.ほぼ身についている、5.十分に身についている) の回答を数値とみなして算出したものである。％は「4.ほぼ身についている」と「5.十分に身についている」に回答した割合を示す。
 (註4)t検定は、実習前と実習後の平均値について検定した結果を示すものであり、***p<.001、**p<.01、*p<.05を意味する。
 (註5)「22年度と23年度の実習前の差」と「22年度と23年度の実習後の差」は、平成22年度と平成23年度の平均値について t検定を施した結果を示すものであり、***p<.001、**p<.01、*p<.05を意味する。

前よりも実習後の方が値が高く、5%水準で有意差が認められた。スタンダード4「保育内容の展開力」では、「(18)絵本、歌、製作、運動遊び等に関する面白さを知っている」(p<.05)、「(17)保育内容の知識に基づき、教材研究ができる」(p<.001)、「(21)自然や自然物と関わり、保育に活用することができる」(p<.05)の各項目において、実習前よりも実習後の値の方が高く、有意差が認められた。スタンダード5「保育評価・改善力」については、「(31)自らの保育を振り返り、反省・評価ができる」(p<.001)、「(32)保育の評価を次の保育や指導計画の改

善に生かすことができる」(p<.05)、「(29)幼児の姿や発想を大切にし、臨機応変に計画を修正することができる」(p<.05)、「(30)観察や記録の方法について理解している」(p<.01)の各項目は、実習前よりも実習後の方が値が高く、有意差が認められた。スタンダード6「職能向上力」については、「(36)自然や社会の事象に興味や関心を持ち、自らの保育に取り入れようとする」(p<.05)と「(42)社会参加活動等を通じて多様な人々との出会いや経験を深めようとする」(p<.05)の各項目では実習前よりも実習後の方が値が高く、有意差が認められた。スタンダー

ド8「保育計画力」では、「(26)ねらい、内容、環境構成、保育者の援助等、整合性のとれた1日の指導計画を立てることができる」($p<.01$)、「(27)幼児の実態と興味や関心を捉え、幼児の活動を予測した指導計画を立てることができる」($p<.001$)、「(28)季節の変化や行事の内容を考慮して、指導計画を立てることができる」($p<.01$)、「(25)教育課程や長期、短期の指導計画の関連性について理解している」($p<.05$)、「(52)幼稚園教育要領の内容を理解している」($p<.01$)の各項目は、実習前よりも実習後の方が値が高く、有意差が認められた。このことから、平成23年度の3週間の教育実習では、実習到達規準に該当する項目を見れば、「幼児理解力」「幼児への指導・援助力」「教職の基礎的遂行力」「保育内容の展開力」「保育評価・改善力」「職能向上力」「保育計画力」のスタンダード領域の28項目について、実習前・後の到達度評価に有意な変化が見られた。

以上の結果から、2週間の教育実習を実施した平成22年度よりも3週間の教育実習を実施した平成23年度の方がより多くの実習到達規準の項目について、実習生の到達度評価が肯定的に変化していることが明らかになった。つまり、3週間の教育実習の方が、実習生の幼稚園教員としての資質能力形成という点で言えば、効果的であるといえる。

(2)スタンダード領域からみた実習生の到達度評価の変容

さらに、平成22年度と平成23年度の実習生の到達度評価を8つのスタンダード領域から把握するために、領域毎に構成項目の合成得点(平均値)を算出し、その結果を示したものが表2である。

実習前・後の到達度評価の差については、平成22年度では「幼児理解力」において1%水準で有意差が認められるが、平成23年度では、「幼児理解力」「保育評価・改善力」「保育計画力」において0.1%水準で有意差が認められ、さらに「幼児への指導・援助力」「教職の基礎的遂行力」「保育内容の展開力」「職能向上力」においても1%水準で有意差が認められた。このことから、スタンダード領域からみても、平成22年度の2週間の教育実習よりも平成23年度の3週間の教育実習の方が実習生の到達度評価に与える影響が大きかったことを示している。

2 実習後における実習生の到達度評価

(1)実習到達規準からみた実習後の到達度評価

平成22年度と平成23年度の実習生が実習後に実地教育Ⅳ(幼稚園教育実習)の実習到達規準についてどの程度到達できているのかを把握するために、表1の「実習後」の到達度評価の平均値に注目したい。ここでは、幼稚園教員養成スタンダードの8領域51項目について平均値を算出し、平均値が3.50以上で、なおかつ「5.十分身についている」と「4.ほぼ身についている」に回答している割合が50%以上であれば、「ある程度身についている」項目であると判断できると考えた¹³⁾。また、平均値が4.00以上で、なおかつ「5.十分身についている」と「4.ほぼ身についている」に回答している割合が80%以上であれば、「かなり身についている」項目であると判断できると考えた。

まず、平成22年度の「実習後」の平均値と、「5.十分身についている」と「4.ほぼ身についている」に回答している割合に注目すると、実習到達規準として項目の前に「◎」あるいは「○」を付している45項目のうち、平均値が3.50以上で、なおかつ「5.十分身についている」と「4.ほぼ身についている」に回答している割合が50%以上であった項目は19項目(42.2%)であり、逆にそれ以外の26項目は平均値が3.50以下の値を示した。さらに、項目の前に「◎」を付した「必ず身につける必要がある」ことを意味する22項目の実習到達規準に関して、平均値が4.00以上で、なおかつ「5.十分身についている」と「4.ほぼ身についている」に回答している割合が80%以上を示した項目は4項目(18.2%)に過ぎなかった。

次に、平成23年度の「実習後」の平均値と、「5.十分身についている」と「4.ほぼ身についている」に回答している割合に注目すると、実習到達規準として項目の前に「◎」あるいは「○」を付した45項目のうち、平均値が3.50以上で、なおかつ「5.十分身についている」と「4.ほぼ身についている」に回答している割合が50%以上であった項目は34項目(75.6%)であった。さらに、項目の前に「◎」を付した「必ず身につける必要がある」ことを意味する22項目の実習到達規準に関して、

表2 8領域からみた実地教育Ⅳ(幼稚園教育実習)における事前と事後の到達度評価

	平成22年度				t検定	平成23年度				22年度と23年度の 実習前の 差	22年度と23年度の 実習後の 差
	実習前		実習後			実習前		実習後			
	平均値(SD)	N	平均値(SD)	N		平均値(SD)	N	平均値(SD)	N		
1)幼児理解力	3.11(.61)	20	3.36(.53)	20	**	3.39(.44)	31	3.69(.41)	31	***	*
2)幼児への指導・援助力	3.37(.61)	20	3.33(.71)	20		3.47(.49)	31	3.81(.51)	31	**	**
3)教職の基礎的遂行力	3.73(.75)	20	3.69(.78)	20		4.01(.51)	31	4.24(.41)	31	**	**
4)保育内容の展開力	3.16(.78)	20	3.17(.71)	20		3.18(.53)	31	3.48(.65)	31	**	
5)保育評価・改善力	3.36(.77)	20	3.39(.76)	20		3.58(.56)	31	4.05(.60)	31	***	***
6)職能向上力	3.50(.88)	20	3.39(.95)	20		3.52(.72)	31	3.82(.57)	31	**	
7)保護者・地域等との連携力	3.47(.73)	20	3.25(.96)	20		3.64(.78)	31	3.79(.69)	31		*
8)保育計画力	3.10(.73)	20	3.18(.81)	20		3.05(.58)	31	3.52(.66)	31	***	

(註1)t検定は、実習前と実習後の平均値について検定した結果であり、*** $p<.001$ 、** $p<.01$ 、* $p<.05$ を意味する。

(註2)「22年度と23年度の実習前の差」と「22年度と23年度の実習後の差」は、平成22年度と平成23年度の平均値についてt検定を施した結果を示すものであり、*** $p<.001$ 、** $p<.01$ 、* $p<.05$ を意味する。

平均値が4.00以上で、なおかつ「5. 十分身についている」と「4. ほぼ身についている」に回答している割合が80%以上を示した項目は、13項目（59.1%）であった。このことから、実地教育Ⅳの実習到達規準の項目について平成22年度と平成23年度の実習後の到達度評価を比較すると、「ある程度身についている」と「かなり身についている」と評価できる項目数は、平成23年度の方が多いといえる。

また、表1に示すように、平成22年度と平成23年度の「実習後」の到達度評価についてt検定を施した結果、51項目中22項目で有意差が認められた。そのうち、実習到達規準に該当する項目については、20項目に有意差が認められた。ここで、さらに平成22年度と平成23年度の「実習前」の到達度評価についてもt検定を施した結果、4項目で有意差が認められた。この結果から、「(15)幼児に公平・公正な態度で関わることができる」と「(37)常に明るく、積極的に物事に取り組んでいくことができる」の2項目については、平成23年度の「実習前」から到達度評価が高かったことが「実習後」の到達度評価の高さに影響を及ぼしたと推察される。

したがって、平成22年度と平成23年度の「実習後」の到達度評価を比較すると、平成23年度の方が到達度評価が高く、とりわけ20項目の実習到達規準において有意差がみられた。

しかし、実地教育Ⅳの実習到達規準として項目の前に「○」を付した項目のうち、平成23年度において、平均値が3.50以上かつ「5. 十分身についている」と「4. ほぼ身についている」の回答割合が50%以上を示していない項目は、スタンダード1「幼児理解力」の「(6)幼児の心身の発育や病気について理解している」「(7)特別支援を必要とする幼児の特徴について理解している」、スタンダード2「幼児への指導・援助力」の「(11)幼児一人ひとりに配慮しながら、集団としてまとまりのある指導ができる」、スタンダード4「保育内容の展開力」の「(23)保育内容に活用できる得意な分野を持っている」「(19)ピアノ、手遊び、パネルシアター、運動遊び等の技術を持っている」「(21)自然や自然物と関わり、保育に活用することができる」「(22)教材を再構成できる柔軟性がある」「(20)音楽遊び、造形遊び、運動遊び等の指導方法を知っている」、スタンダード5「保育評価・改善力」の「(29)幼児の姿や発想を大切に、臨機応変に計画を修正することができる」、そして、スタンダード8「保育計画力」の「(26)ねらい、内容、環境構成、保育者の援助等、整合性のとれた1日の指導計画を立てることができる」「(25)教育課程や長期、短期の指導計画の関連性について理解している」の11項目であった。これらの項目は、「ある程度身についている」と自己評価できる状態に達していない実習生が多いことから、実

習後に「ある程度身についている」といえる状態に達することが実地教育Ⅳの課題である。

また、平成23年度のもう一つの課題は、項目の前に「◎」を付した項目に関して、実習後に平均値が4.00以上、なおかつ「5. 十分身についている」と「4. ほぼ身についている」の回答割合が80%以上を示していないのが7項目あったことである。具体的には、スタンダード3「教職の基礎的遂行力」の「(51)危機管理の意識を持っている」、スタンダード4「保育内容の展開力」の「(23)保育内容に活用できる得意な分野を持っている」「(19)ピアノ、手遊び、パネルシアター、運動遊び等の技術を持っている」、スタンダード6「職能向上力」の「(41)研修に積極的に参加して、保育者としての専門性を高めようとする」「(36)自然や社会の事象に興味や関心を持ち、自らの保育に取り入れようとする」、スタンダード8「保育計画力」の「(28)季節の変化や行事の内容を考慮して、指導計画を立てることができる」「(52)幼稚園教育要領の内容を理解している」が該当する。こうしたスタンダードの項目についての到達度評価を、実習後に「かなり身についている」と評価できる状況に高めていくことが今後の課題である。

(2) スタンダード領域からみた実習後の到達度評価

さらに、平成22年度と平成23年度の「実習後」の到達度評価の差異をスタンダード領域の観点から捉えるために、表2の「実習後」の到達度評価の平均値に注目したい。

表2によると、平成22年度の「実習後」の到達度評価において比較的高い平均値が得られたスタンダード領域は「教職の基礎的遂行力」(3.69)であった。また、平成23年度の「実習後」の到達度評価において比較的高い平均値が得られたスタンダード領域は、「教職の基礎的遂行力」(4.24)、「保育評価・改善力」(4.05)、「職能向上力」(3.82)、「幼児への指導・援助力」(3.81)であった。このことから、平成23年度の実習後には、これら4つの領域の資質能力を身につけたと認識している学生を養成できているものと考えられる。

その上で、平成22年度と平成23年度の「実習後」の到達度評価を比較すると、すべてのスタンダード領域において平成23年度の方が「実習後」の平均値が高く、「幼児理解力」($p<.05$)、「幼児への指導・援助力」($p<.01$)、「教職の基礎的遂行力」($p<.01$)、「保育評価・改善力」($p<.001$)、「保護者・地域等との連携力」($p<.05$)の各領域において有意差が認められた。

これらの結果から、実地教育Ⅳの単位数の増加により、スタンダード領域からみても実習生の実習後の到達度評価が高まっていることが明らかとなった。

3 実習後における実習生と実習指導教諭の到達度評価

平成22年度と平成23年度の「実習後」における実習生

表3 幼稚園教員養成スタンダードからみた実地教育Ⅳ（幼稚園教育実習）の実習生と実習指導教諭の到達度評価

実習到達標準の妥当性	平成22年度										平成23年度										22年度と23年度の指導教諭の評価の差
	実習生		実習指導教諭		t検定	実習生		実習指導教諭		t検定											
	Mean(SD)	%	Mean(SD)	%		Mean(SD)	%	Mean(SD)	%												
1) 幼児理解力																					
○ (8)先入観を持たずに、幼児のありのままの姿を共感的・肯定的に受け止めることができる。	3.87(.74)	80.0	3.80(.68)	66.6		4.33(.49)	100.0	4.11(.76)	77.7												
○ (1)幼児の遊びの姿から、一人ひとりの興味や関心を捉えることができ	3.80(.41)	80.0	3.33(.62)	40.0	*	4.00(.49)	88.9	3.72(.75)	55.6												
○ (3)幼児の様々な行動から、心情や意欲等の内面を理解することができる。	3.40(.63)	46.7	3.27(.59)	33.3		3.67(.49)	66.7	3.56(.51)	55.6												
○ (2)個々の幼児の人との関わり方や集団の中での育ちを捉えることができる。	3.33(.62)	40.0	3.27(.46)	26.7		3.94(.64)	77.8	3.56(.62)	61.1												
○ (4)幼児の気になる行動や態度についての要因を自分なりに分析することができる。	3.67(.72)	66.7	3.60(.74)	60.0		3.72(.57)	66.7	3.61(.85)	50.0												
○ (5)幼児期の発達の特徴について理解している。	3.53(.52)	53.5	3.40(.51)	40.0		3.72(.57)	66.7	3.72(.57)	66.7												
○ (6)幼児の身体の発育や病気について理解している。	2.93(.70)	20.0	3.00(.58)	15.4		3.50(.79)	55.6	2.94(.80)	16.7	*											
○ (7)特別支援を必要とする幼児の特徴について理解している。	3.00(.85)	20.0	3.00(.58)	15.4		3.28(.75)	44.4	2.89(.58)	11.1												
2) 幼児への指導・援助力																					
◎ (12)視線を合わせて幼児に接し、心通わせながら関わりができる。	4.07(.88)	80.0	3.93(.88)	73.4		4.44(.62)	94.4	4.39(.61)	94.4												
◎ (10)幼児の状況の変化や多様な要求に対して、一人ひとりに丁寧な関わりができる。	3.33(1.05)	33.3	3.47(.83)	40.0		4.17(.62)	88.9	3.78(.73)	61.1												
○ (14)幼児の主体性や自立性の育ちを大切にしたい関わりができる。	3.53(.64)	46.7	3.13(.52)	20.0		3.78(.65)	77.8	3.56(.70)	55.6												
○ (13)幼児が十分な満足感や達成感を感じられるように関わることができる。	3.33(.82)	40.0	2.93(.59)	13.3		3.83(.71)	66.7	3.61(.78)	55.5									**			
○ (9)状況や課題等に応じて意思決定や行為選択ができる。	3.20(.68)	33.3	3.13(.74)	33.3		3.56(.62)	61.1	3.39(.78)	44.5												
○ (11)幼児一人ひとりに配慮しながら、集団としてまとまりのある指導ができる。	3.20(.56)	26.7	3.07(.70)	26.7		3.44(.62)	50.0	3.22(.88)	50.0												
3) 教職の基礎的遂行力																					
◎ (38)他の人の意見に謙虚に耳を傾け、自ら学ぼうとする。	4.13(.64)	86.7	4.13(.74)	80.0		4.56(.51)	100.0	4.61(.70)	88.9												
◎ (34)心身共に良好な状態であるように自己管理ができる。	3.73(.80)	53.3	4.07(.96)	73.3		4.11(1.02)	77.7	4.44(.92)	83.4												
◎ (48)保護者や地域の人々に日常の挨拶がきちんとできる。	4.20(.68)	86.6	4.27(.70)	86.7		4.83(.38)	100.0	4.44(.70)	88.9	*											
◎ (35)社会人としての適切な礼儀、身だしなみ、言葉遣いができる。	3.87(.83)	73.3	4.40(.63)	93.4		4.28(.57)	94.4	4.67(.59)	94.4												
◎ (15)幼児に公平・公正な態度で関わりすることができる。	4.00(.85)	80.0	4.20(.56)	93.4		4.50(.51)	100.0	4.22(.73)	83.3												
◎ (39)一つのチームとして園の保育に取り組むことができる。	3.67(.82)	60.0	3.47(.52)	46.7		4.22(.55)	94.5	3.89(.83)	61.1												
◎ (37)常に明るく、積極的に物事に取り組んでいくことができる。	3.87(.83)	73.3	4.00(.85)	66.6		4.44(.62)	94.4	4.56(.62)	94.4	*											
◎ (33)保育者としての自覚と誇り、使命感を持っている。	3.87(.83)	73.3	3.87(.74)	66.7		4.33(.59)	94.5	4.33(.69)	88.8												
◎ (16)幼児に対して正しくわかりやすい言葉遣いができる。	3.53(.99)	60.0	3.53(.74)	53.4		4.11(.76)	77.7	3.94(.80)	66.7												
○ (40)困難な事態に対しても問題解決に向けて粘り強く取り組むことができる。	4.00(.85)	80.0	3.64(.63)	57.1		4.33(.69)	88.8	3.89(.58)	77.8	*											
◎ (51)危機管理の意識を持っている。	3.40(.83)	33.3	3.27(.80)	33.4		4.00(.59)	83.4	3.56(.70)	88.9	*											
◎ (50)事務的な仕事や園内整備等の仕事について理解している。	3.00(.85)	26.7	3.20(.94)	46.7		3.89(.76)	66.6	3.11(1.02)	33.3	*											
4) 保育内容の展開力																					
◎ (18)絵本、歌、製作、運動遊び等に関する面白さを知っている。	4.07(.80)	86.7	3.80(.68)	66.6		4.28(.89)	83.3	3.94(.73)	83.4												
◎ (23)保育内容に活用できる得意な分野を持っている。	3.67(1.18)	73.3	3.60(.83)	53.3		3.67(.91)	50.0	3.61(.70)	61.2												
○ (17)保育内容の知識に基づき、教材研究ができる。	3.20(.78)	40.0	3.33(.62)	40.0		3.56(.70)	55.6	3.72(.96)	61.1												

◎ (19)ピアノ、手遊び、パネルシアター、運動遊び等の技術を持っている。	2.93(.88)	26.7	3.20(.68)	33.3	3.33(.84)	44.5	3.61(.61)	66.7	
○ (21)自然や自然物と関わり、保育に活用することができる。	3.27(.59)	33.3	3.20(.68)	33.3	3.39(.85)	38.9	3.33(.77)	38.9	
○ (22)教材を再構成できる柔軟性がある。	2.60(.83)	13.3	2.80(.68)	13.3	3.00(.91)	27.8	3.22(.81)	33.4	
○ (20)音楽遊び、造形遊び、運動遊び等の指導方法を知っている。	2.87(.74)	13.3	2.93(.59)	13.3	3.22(.65)	33.3	3.17(.62)	27.8	
5) 保育評価・改善力									
◎ (31)自らの保育を振り返り、反省・評価ができる。	3.93(.80)	66.7	4.00(.66)	80.0	4.39(.61)	94.4	4.67(.59)	94.4	**
◎ (32)保育の評価を次の保育や指導計画の改善に生かすことができる。	3.67(.82)	46.7	3.87(.64)	73.3	4.11(.68)	83.4	4.33(.77)	83.3	
○ (29)幼児の姿や発想を大切に、臨機応変に計画を修正することができる。	2.80(.68)	13.3	3.20(.68)	33.3	3.39(.78)	44.5	3.44(.78)	50.0	
◎ (30)観察や記録の方法について理解している。	3.47(.99)	46.6	4.07(.70)	80.0	4.28(.75)	83.3	4.39(.70)	88.9	
6) 職能向上力									
◎ (41)研修に積極的に参加して、保育者としての専門性を高めようとする。	3.27(.96)	33.3	3.42(.90)	50.0	3.78(.94)	66.6	4.00(.91)	72.2	
◎ (36)自然や社会の事象に興味や関心を持ち、自らの保育に取り入れようとする。	3.73(.88)	60.0	3.79(.70)	64.3	3.94(.64)	77.8	3.83(.71)	66.7	
○ (42)社会参加活動等を通じて多様な人々との出会いや経験を深めようとする。	3.67(.90)	40.0	3.50(.91)	58.3	4.17(.86)	83.3	3.89(.90)	66.7	
○ (49)保護者や地域の人々との関わりから学び、それを自らの保育に生かそうとする。	3.53(1.13)	53.3	3.09(.70)	27.3	3.61(.98)	50.0	3.28(.67)	27.8	
7) 保護者・地域等との連携力									
○ (47)保護者の話にしっかりと耳を傾け、聴くことができる。	3.67(.98)	66.6	3.18(.98)	36.4	4.28(.89)	72.3	3.44(.98)	44.5	*
○ (46)保護者との会話を大切に、積極的に関わることができる。	3.40(.99)	40.0	2.82(.75)	18.2	3.78(1.06)	55.5	3.22(.94)	33.3	
○ (43)保護者や地域の人々と手を携え、共に歩んでいこうとする。	3.27(1.03)	33.3	2.64(.67)	9.1	3.67(.84)	55.6	3.11(.76)	22.3	*
○ (53)幼稚園と保育所や小学校との連携に関する知識を持っている。	3.20(.94)	26.6	3.00(.85)	25.0	3.78(.73)	61.1	3.17(.86)	33.4	*
○ (44)幼稚園のある地域に関心を持ち、地域の特性を理解しようとする。	3.13(.92)	40.0	3.08(.76)	30.8	3.94(.73)	72.2	3.61(.92)	66.7	
8) 保育計画力									
○ (26)ねらい、内容、環境構成、保育者の援助等、整合性のとれた1日の指導計画を立てることができる。	3.27(.59)	33.3	3.53(.74)	53.4	3.44(.70)	55.6	3.56(.86)	55.5	
○ (27)幼児の実態と興味や関心をつかえ、幼児の活動を予測した指導計画を立てることができる。	3.20(.68)	33.3	3.27(.70)	40.0	3.67(.91)	61.1	3.50(.62)	55.6	
◎ (28)季節の変化や行事の内容を考慮して、指導計画を立てることができる。	3.33(.72)	46.7	3.40(.83)	46.7	3.67(.84)	66.7	3.39(.85)	50.0	
○ (25)教育課程や長期、短期の指導計画の関連性について理解している。	3.13(.74)	33.3	3.13(.74)	33.3	3.50(.86)	61.2	3.44(.92)	50.0	
◎ (52)幼稚園教育要領の内容を理解している。	3.13(.92)	33.4	3.40(.83)	46.7	3.78(.73)	72.2	3.72(.83)	72.2	

(註1)分析結果は、平成22年度と平成23年度に実地教育IV(幼稚園教育実習)を履修した実習生と実習指導教諭、それぞれ n=15と n=18のデータに基づいている。

(註2)項目番号の前の「○」は、実習指導教諭が回答した実習到達規準としての適合度の平均値が3.50以上4.00未満で、5件法の「4.ほぼあてはまる」と「5.十分あてはまる」の回答率が50.0%以上であり、実習到達規準としてある程度妥当性のある項目であることを示す。項目番号の前の「◎」は、実習指導教諭が回答した実習到達規準としての適合度の平均値が4.00以上で、5件法の「4.ほぼあてはまる」と「5.十分あてはまる」の回答率が80.0%以上であり、実習到達規準としてかなり妥当性の高い項目であることを示す。

(註3)実習生と実習指導教諭の平均値は、5件法(1.全く身についていない、2.あまり身についていない、3.少し身についている、4.ほぼ身についている、5.十分身についている)を数値とみなして算出したものである。%は「4.ほぼ身についている」と「5.十分身についている」に回答した割合を示す。

(註4)t検定は、実習後の実習生と実習指導教諭の評価の平均値について検定した結果を示すものであり、***:p<.001、**p<.01、*p<.05を意味する。

(註5)「22年度と23年度の指導教諭の評価の差」は、平成22年度と平成23年度の実習指導教諭の平均値についてt検定を施した結果を示すものであり、***:p<.001、**p<.01、*p<.05を意味する。

自身の到達度評価をより客観的に捉えるために、実習後の実習指導教諭による実習生の到達度評価と比較した結果を示したものが表3である。

まず、平成22年度の実習生と実習指導教諭の平均値の

差を捉えると、実習指導教諭よりも実習生の方が到達度評価が有意に高い項目は、(1)のみであった。この結果から、平成22年度では、双方の到達度評価にはほとんど差がなかったといえる。

一方、平成23年度の実習生と実習指導教諭の平均値の差を見ると、実習指導教諭よりも実習生の方が到達度評価が有意に高い項目は、実習到達規準の項目に限れば、(6)、(48)、(40)、(51)、(47)であった。このことから、平成23年度は、実習到達規準の項目について言えば、5項目が実習指導教諭による到達度評価よりも実習生自身の到達度評価の方が高くなったが、それ以外の項目では差は見られなかった。

さらに、平成22年度と平成23年度の実習指導教諭による到達度評価を比較すると、平成22年度の場合、実習指導教諭の平均値が3.50以上かつ「5. 十分身についている」と「4. ほぼ身についている」の回答割合が50%以上を示した項目は、45項目の実習到達規準のうち20項目(44.4%)であった。他方、平成23年度の場合、実習指導教諭の平均値が3.50以上かつ「5. 十分身についている」と「4. ほぼ身についている」の回答割合が50%以上を示した項目は、45項目の実習到達規準のうち34項目(75.6%)であった。また、平成22年度と平成23年度の実習指導教諭の平均値について t 検定を施した結果、「(13) 幼児が十分な満足感や達成感を感じられるように関わることができる」($p<.01$)、「(37) 常に明るく、積極的に物事に取り組んでいくことができる」($p<.05$)、「(31) 自らの保育を振り返り、反省・評価ができる」($p<.01$)の3項目において有意差が認められた。このことから、平成22年度よりも平成23年度の方が実習指導教諭の到達度評価が高くなっていることが明らかとなった。

以上のことから、平成22年度と平成23年度における実習生自身の到達度評価と実習指導教諭による実習生の到達度評価を比較した結果、実地教育Ⅳの単位数が2単位から3単位に増加し、実習期間が2週間から3週間になることによって、実習生自身の到達度評価が有意に高まるのと同様に、実習指導教諭による実習生の到達度評価も高くなっていることが明らかになった。

Ⅳ まとめ

本稿では、兵庫教育大学学部4年次生が応用実習として履修する実地教育Ⅳ(幼稚園教育実習)の単位数が2単位から3単位に増加したことによって、幼稚園教員養成スタンダードに基づく実地教育Ⅳの実習到達規準を用いて、実習生の資質能力に対する到達度評価がどの程度変容し、実習到達規準にどの程度到達しているのかを明らかにするために、4年次の実習生と実習指導教諭を対象に実施した質問紙調査の結果をもとに検討した。

その結果、実習前・後の実習生の到達度評価の変容については、2単位の教育実習を実施した平成22年度よりも3単位の教育実習を実施した平成23年度の方が、より多くの実習到達規準の項目において実習生の到達度評価が肯定的に変化していることが確認された。

また、実習後における実習生の到達度評価については、実習到達規準の項目において平成22年度と平成23年度の実習後の到達度評価を比較すると、「ある程度身についている」や「かなり身についている」の状態に達している項目が平成23年度の方が多かった。このことと関わって、平成22年度と平成23年度の実習後の到達度評価について t 検定を施した結果、平成23年度の到達度評価の方が有意に高いことが認められた。

しかし、実習生の到達度評価が高い平成23年度において、「○」を付した「身につけることが望ましい」とされる実習到達規準の項目でも、「幼児理解力」「幼児への指導・援助力」「保育内容の展開力」「保育評価・改善力」「保育計画力」の領域に属する11項目に関しては、実習後に「ある程度身についている」といえる状態に達していない実習生が多いことが確認された。また、「◎」を付した「必ず身につける必要がある」とされる実習到達規準の項目でも、「教職の基礎的遂行力」「保育内容の展開力」「職能向上力」「保育計画力」の領域に属する7項目に関しては、実習後に「かなり身についている」と評価できる状況に達していないことが確認された。これらの項目が実習後に「ある程度身についている」や「かなり身についている」と評価できる状況に達するように、実地教育Ⅳの実習を改善することが課題である。

さらに、実習後の実習生と実習指導教諭の到達度評価の比較では、平成22年度では実習指導教諭の到達度評価よりも実習生の到達度評価の方が高く評価しているのは1項目だったが、平成23年度では、実習指導教諭の到達度評価よりも実習生の到達度評価の方が高く評価しているのは5項目となった。そして、平成22年度と平成23年度の実習指導教諭の到達度評価を比較すると、平成22年度よりも平成23年度の方が実習指導教諭の到達度評価が高くなった。

このことから、実地教育Ⅳの単位数が2単位から3単位に増加することによって、実習生自身による到達度評価が有意に高まるとともに、実習指導教諭による実習生の到達度評価も高くなることが明らかになった。

この結果は、同時期に行った実地教育Ⅳの小学校教育実習の場合に同様の小学校教員養成スタンダードに基づく質問紙調査を実施し、同様の手順で分析した先行研究¹⁴⁾と比較すると、実習単位数が2単位から3単位になることによって実習生自身による到達度評価が有意に高まったことは同じであったが、実習指導教諭による実習生の到達度評価についてはほとんど差が生じなかったという点で違っていた。

今後は、研究結果に違いが生じたのはどのような点に問題があったのかを探究していきたい。まず第一に考えられることは、小学校教育実習の場合に比べてデータ数が少なかったことが研究結果に影響を及ぼした可能性で

ある。そのために、さらにデータを蓄積して分析を行う必要がある。第二に考えられることは、2週間と3週間では実地教育Ⅳの幼稚園教育実習における実習生の学びの内容と保育実践の質が小学校教育実習の場合と異なっていた可能性である。このことから、実習の3週間化によって、幼稚園と小学校での実践の質的な違いが実習生の実習の質の違いにどのような影響を及ぼしているのか、また、実習の3週間化により、幼稚園と小学校での実践の質的な違いが幼稚園と小学校での実習指導教諭の指導の観点や評価の重点の違いにどのような影響を及ぼしているのかについて明らかにしていきたいと考えている。

【註及び引用文献】

- 1) 中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)」、2006年。
- 2) 本研究で用いた幼稚園教員養成スタンダードは8領域51項目からなるものであり、その内容は2011年の論文(別惣淳二・名須川知子・横川和章・長澤憲保・鈴木正敏・佐藤哲也・石野秀明・上西一郎・飯塚恭一郎・岸本美保子「大学卒業時に求められる幼稚園教員の実践的資質能力の明確化—幼稚園教員養成スタンダードの開発—」『日本教育大学協会研究年報』第29集、2011年、161-174頁)に掲載されている。その後、兵庫教育大学では、この幼稚園教員養成スタンダードを元にして「教員養成スタンダード(幼稚園版)」(別惣淳二・渡邊隆信編『教員養成スタンダードに基づく教員の質保証—学生の自己成長を促す全学的学習支援体制の構築—』ジアース教育新社、2012年、62-84頁を参照されたい)が開発されている。
- 3) 別惣淳二・名須川知子・横川和章・長澤憲保・鈴木正敏・石野秀明「幼稚園教員養成スタンダードに基づく実習到達規準の明確化—4年間の幼稚園教育実習科目における到達規準の体系化を目指して—」『日本教育大学協会研究年報』第30集、2012年、107-118頁。
- 4) 別惣淳二・名須川知子・横川和章・鈴木正敏・長澤憲保「幼稚園教員養成スタンダードに基づく実習到達規準から捉えた実習成果と課題(Ⅱ)—第4年次の公私立幼稚園実習の場合—」『兵庫教育大学研究紀要』第46巻、2015年、133-145頁。
- 5) 兵庫教育大学の実地教育Ⅳは、学部3年次において4週間の附属幼稚園又は附属小学校で行う基礎実習を踏まえて履修する応用実習としての意味合いを有しており、4年次生が出身幼稚園等で「地域社会と児童又は幼児の実態に応じた教育のあり方について学び、地域社会及び児童又は幼児の実態に応じた教育を実践するとともに、併せて指導方法及び技術を充実させ、教師としての資質を高め、責務を自覚する」ことを目的とした必修の教育実習である。
- 6) 住野好久・岡野勉・林尚示・濁川明男「国立教員養成系大学・学部における教育実習カリキュラムの系統化に関する研究—教育実習改革の動向調査をふまえて—」『日本教師教育学会年報』第13号、2004年、84-93頁。
- 7) 米沢崇「我が国における教育実習研究の課題と展望」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第一部第57号、2008年、51-58頁。
- 8) 大塚健樹「幼稚園教育実習評価と自己評価の比較—本学幼児教育科学生の場合—」『盛岡大学短期大学部紀要』第10巻、2000年、27-32頁。加藤渡・烏田直哉「幼稚園教育実習における実習指導員評価と自己評価との比較」『一宮女子短期大学紀要』第46集、2007年、155-164頁。名倉一美・三輪千明・茂井万里絵「幼稚園教育実習の指導のあり方について—実習園の評価と学生の自己評価との比較から—」『浜松学院大学研究論集』第7号、2011年、149-164頁。篠原祝子「幼稚園教育実習における実習態度—平成22年度6月「幼稚園実習」の実習園評価と実習生評価の比較—」『鹿児島国際大学福祉社会学部論集』第30巻第3号、2011年、67-77頁。
- 9) 高橋真由美「幼稚園教育実習における学生の学びに関する一考察(2)—幼稚園実習Ⅰと幼稚園実習Ⅱの学びの比較から—」『藤女子大学紀要』第46号第Ⅱ部、2009年、113-118頁。
- 10) 高橋裕子・大瀧ミドリ・今村聡美「幼稚園教育実習における事前準備の習熟度と事後の自己評価について—「教材研究」「子どもの気持ちの読み取り」「満足度」の観点から—」『東京家政大学研究紀要』第51集(1)、2011年、7-13頁。
- 11) 表1では、実地教育Ⅳ(幼稚園教育実習)の実習到達規準として妥当性のある項目の前に「○」あるいは「◎」を付した。「○」を付した項目は、実習指導教諭が回答した実習到達規準としての適合度の平均値が3.50以上4.00未満で、5件法の「4.ほぼあてはまる」と「5.十分あてはまる」に回答した割合が50.0%以上の項目であり、「◎」を付した項目は、実習指導教諭が回答した実習到達規準としての適合度の平均値が4.00以上で、5件法の「4.ほぼあてはまる」と「5.十分あてはまる」に回答した割合が80.0%の項目である。詳しくは、前掲3)の別惣・名須川・横川・長澤・鈴木・石野、2012年の研究論文を参照されたい。表3の実習到達規準も同様である。
- 12) 表1及び表3の項目番号の順は、幼稚園教員養成スタンダードの構成項目を策定する際に設定したものであり、本研究ではそれとの一貫性を保つために幼稚園教員養成スタンダードの項目番号の順をそのまま用いている。詳しくは、前掲2)の別惣・名須川・横川・長澤・鈴木・佐藤・石野・上西・飯塚・岸本、2011年

の研究論文を参照されたい。

- 13) 平均値が3.50以上という基準は、1 サンプルの t 検定において3.00を検定値にとった場合に5%水準で有意であったことも理由の一つである。
- 14) 別惣淳二・長澤憲保「小学校教員養成スタンダードに基づく実習到達規準から捉えた実習成果—実地教育Ⅳ（小学校教育実習）における単位数増加の効果について—」『兵庫教育大学研究紀要』第49巻、2016年、131-141頁。

【謝辞】

本研究で用いた質問紙調査の回答にご協力いただきました兵庫教育大学学部4年次生ならびに実習校の実習指導教諭の方々に心より感謝申し上げます。